

ご主人様の指先はいつも甘い蜜みつで濡れている

目次

ご主人様の指先はいつも甘い蜜みつで濡ぬれている

5

後日談 愛の宴うたげにとろける夜

257

ご主人様の指先はいつも甘い蜜みつで濡ぬれている

1 恋がはじまる十秒前

わずかに四帖ほどの狭い空間だった。

落ち着いたデザインの照明器具と、磨き上げられた紫檀の机。大きく立派な書棚には、難しそうなタイトルの本がびっしりと詰まっている。

総合して考えるに、ここはおそらく書齋だろう。

そして――

私は今、ついさっき会ったばかりの男に壁際に追い詰められている。

なぜだ。

私はただ、家事代行スタッフとして仕事の打ち合わせをするために、依頼人のもとを訪れただけなのに。

「で、佐木菜のかさん。俺の依頼を受ける気になった？」

響きのいい低音が、耳元で私の名を呼んだ。

優に頭ひとつ分は超える背丈。

スーツの上からでもわかるほど逞しい肉体。

その大柄な身体が、私に覆い被さるように立ちはだかっている。

はだけたシャツの胸元からは、セクシーな香りが立ちのぼっていて――

……ああ、だめだ。くらくらする。それに、腰のあたりのぞくぞくが止まらないのはなぜだろう。浅い呼吸を繰り返しながら、私は強引に迫るクライアントから顔を背けた。

「あ、あの、ちょっと待ってください。いきなりそんなこと言われなくても、私」

「できれば無理強いはしたくないんだ。報酬だって弾む。君が会社からもらう賃金の他に、特別手当を渡そう。期間はたった三か月。ほら、悪い話じゃないだろう？」

「いえ、あのっ、ですから……！ お客様からの個人的なご依頼をお受けする権限は、私にはないのです。メニュー以外のご要望につきましては、社長に相談しませんと――」

「社長……？ あー、中惣さんに話すというのと面倒だろう。何も言わない方が賢明だと思うな」

……は？

終始穏やかな口調ながらも、男の言い分はどこか勝手だ。強引を通り越して、怪しいにおいまでする。

目の前にいる男の要望とは、通常『通い』でしか行っていない業務を『住み込み』でやってほしいというものだった。それならば、初めから住み込みの仕事を受けている業者に頼めばいいはず。それを今日初めて会ったスタッフに依頼し、あろうことか、密室に閉じ込めて壁ドンまでするなんて――

本来であれば、逃げ出してもいいシチュエーションだろう。しかし男は、社長の中惣さんと知り合いという話。懇意にしている仲らしいので、無下に扱うこともできない。

もしかして、家事代行を利用するのは初めてなのだろうか。だからこんな態度を……？ そういうことなら、私が勘違いの甚だしさを教えてやらなければ。

「星見さん」

背筋を伸ばして、少し強めの口調で男を呼ぶ。すると、眼鏡の奥の伶俐な目元が、人懐こそうにカーブを描いた。

「なに？ 菜のかちゃん」

……なっ！ し、下の名前にちゃんづけとか!!

ズキーン、と心臓を撃ち抜かれた気がした。

畳みかけるように、真っ直ぐに見詰めてくる見目麗しい男。ときめきを自制する間もなく、カアアア、と頬に血が集まっていく。

「あああの、あのですね」

「ん？」

ゆでダコのようになった顔を間近で見られて、ますます頭が真っ白になった。それでもなお、男は視線を外さない。

男の目は、どこか異国の血がまじっているような淡い色合いをしていた。まるでアンティークのガラス細工みたいで、あまり覗き込むと吸い込まれそうになってしまう。それに加えて、切れ長で

くつきりとしたきれいな二重が、意外にもかわいらしい。

視線をずらせば、男らしく、しっかりした顎。

スツと通った鼻筋。

よく見れば、まつ毛だつて……こんなに、長くて……

はっ。

いやいやいや、ちょっと待った。これじゃあ完全に男の術中じゃない！

きっとこれは罠だ。目を合わせただけで妊娠させるタイプの男に違い……!!

「あの、星見さん。今日のところは一度社に戻って検討をですね——」

ところが、言い終わらないうちに男は、ずい、と更に距離を詰めてきた。息がかかるほど近くに顔があつて、もうドッキドキである。

男は妖艶な目つきで私の髪を撫でながら、衝撃的なひと言を放った。

「報酬のことだけど……月に一〇〇万でどうかな」

「ひゃっ、ひゃっ、ひやくまんえん……!?」

「ああ、一〇〇万。他に欲しいものや買いたいものがあつたら言うといい。とりあえず、今月の分は前金で渡しておく。残りの二〇〇万は、君がすっかり期間満了までいてくれたら支払おう」

スーツの内ポケットに男の手が潜り、次に出てきたときには銀行の封筒を掴んでいた。

男が私の腕を取り、手のひらを上に向けさせる。ずしり、と分厚いそれが載せられた。

「社長には内緒だよ」

囁かれた瞬間、脳みそがスポンとどこかへ飛んでいってしまった。

封筒の中身はおそらく諭吉様の束だろう。もしかして帯封だつてついたままかもしれない。

——このお金があれば夢に一步近づける。

そう思ってしまったのが間違いだった。

「身ひとつで来てくれて構わないが、君にも準備があるだろう。俺はこれから商談があつて出かけなくちゃならないから、詳しいことはまた明日の朝話すということ。ここに一日の大まかなスケジュールを書いたから読んでおいて」

星見さんが、さつきとは別の事務用封筒を取り出して、むぎゅ、と私の胸に押しつける。それを心ここにあらずの状態で受け取った。

「じゃ、明日ね」

「は……は？」

腰に触れる手のあたたかさを感じながら、私は星見郎をあとにしたのだった。

瀟洒な住宅が建ち並ぶ駅までの道のりを、どう歩いたのかもわからない。

今日はじめて訪問したお宅。依頼人は若くて素敵な外見をした星見さんだった。

その星見さんとの約束は、三か月。

たった三か月住み込みで働いただけで、毎月のお給料の他に三〇〇万円も手に入るなんて、夢を見ているんじゃないかと思う。

駅にたどり着いた私は、きよろきよろと辺りを警戒しながらトイレに駆け込んだ。個室に入り、銀行の封筒の中身を確認する。

やはり帯封がついている。ということ、これが一〇〇万円なのか……

実際に目にした途端、そんな大金を持ち歩いていることが怖くなった。

あとをつけられていたらどうしよう。トイレに盗撮用のカメラが仕掛けられていたらどうしよう、と個室内をキョロキョロする。

……そうだ、一度駅前ロータリーに引き返して銀行に預けてくれればいい。

落とさないよう慎重に、お金をバッグに戻す。と、そのとき、何かが手に触れて、最後に渡された封筒の存在をようやく思い出した。

なんの変哲もないクラフト紙の封筒。外側には何も書いておらず、中には便箋が一枚だけ入っている。

取り出して広げてみると、男らしい達筆で、星見さんが言っていた『スケジュール』が恐ろしいほどざつくりと書いてあった。しかし、注目すべきはそこじゃない。白い便箋の一番下にさりげなく書かれた言葉。その二行を見たとき、私は思わず息をのんだ。

——近所には既婚者ということにしているので、表向き君は私の妻です。明日は裏口の門から入ってください。インターホンを押す必要はありません。玄関ドアの鍵は開けておきます。よろしく——

「……は!?!」

……妻！ 妻、ですと!?

『君は私の妻』——何度もその部分だけを読んで、トイレの個室内でうろたえる。まさか、腰にくるあの低音で「菜のか」なんて、名前を呼び捨てにされるのだろうか。近所の人と会話するときには「うちの主人が」とか言わなくちゃならないのだろうか。

気がつけば、手にした便箋びんせんを皺しわができるほど握りしめていた。脚はぶるぶると震え、額ぬかと脇わきに変な汗までかいて。

本当は知り合いでもなんでもない、ただの依頼人と使用人の関係だ。それなのに、まるで恋が始まってしまったかのような高揚感、胸のときめきを覚えるのはなぜだろう。そして、星見さんの端正な顔立ちと、スーツに隠された逞たくましい肉体を思い浮かべれば——

……はっ。違う違う!

これにはきつと、何か理由があるはずだ。赤の他人である私を『妻』に仕立て上げなければならぬような、のつびきならない理由が。

二十六歳というこの歳まで、男性と口づけはおろか、付き合ったこともなかった私には、『妻』という単語自体が衝撃的だった。ましてや、それが自分に向けられるなんて。

浮遊魔法にでもかかっているかのようなふわふわした足取りのまま、私はとりあえず会社へと向かった。

*

電車に揺られること二十分。勤め先である有限会社サンジェクスに戻ったときには、私は疲れ切っていた。

いくらなんでも取り乱しすぎた。

星見さんの手紙にあった『妻』という言葉に動揺した私は、銀行に一〇〇万円を預けるのをすっかり忘れてしまった。そのせいでバッグに大金が入ったまま移動することになり、自みずから緊張を煽ほつてしまう始末。サンジェクスの最寄り駅にある銀行で無事預けることはできたものの、会社に着く頃には、そんな大金を安易に受け取ってしまったことへの後悔も始まって……

ああ、なんであんなにものぼせてしまったんだろう。降くだってわいた一〇〇万円のせい？ それとも、星見さんがイケメンすぎたからだろうか。

——まあ菜のかさんよ、とりあえず少し落ち着こうじゃないか。

そう思い、私は事務所に着いてすぐに、コーヒーを入れた。だけどそれは手つかずの状態でもう冷めきっている。何しろパソコンに向かって顧客名簿の画面を開いたまま、かなりの時間が経過しているからだ。

問題の壁、ドン男は、星見りょう了りょうと聞いた。

顧客名簿の内容によると、年齢は三十二歳で独身。勤務先は『星見開発』。その代表のようだ。備考欄には、星見開発の関連会社を複数経営とある。

さつき訪問したあのお屋敷は東京近郊で仕事をする際の拠点で、その他にも全国各地に別宅を

持っているようだ。

なるほど。この歳で会社経営とは、どうやら彼はやり手らしい。

サンジエクスに限らず、家事代行業者の客といえば、大抵が中高年のおじさまかマダムである。だから、若くてイケメンなこのクライアントを初めて見たときの印象は、『フッキー!』だった。でも――

なんだかおかしなことになってしまった。明日からの仕事に先立つての打ち合わせ……のつもりが、気づけば一〇〇万円を受け取っていたなんて――

どう考えても、一会社員の私が、お客さんと個人的に契約を交わしていいはずがない。しかも、たった三か月働いただけで一年分の収入が手に入るなんて、どう考えたってアヤシイ話だ。イケメン効果に当てられたのか、それとも壁ドンされて意識が朦朧^{もうちろう}としていたのか。

……ああ、どうしてこんなことになっちゃったんだろう。

「――さん。……菜のかさん、つてば!」

「ふああっ!」

肩を思い切り揺さぶられて、やっと気がついた。パソコンから顔を上げてみれば、後輩の美奈ちゃん^{みな}がじーっと覗き込んでいる。

「みつ、美奈ちゃん。何か用?」

「もう、さつきから話しかけてるのに、全っ然聞いてないんだからあ」

「ごっ、ごめん。ちょっと考えごとしちゃって」

頭をかく私の隣に、美奈ちゃんはいそいそと腰かけた。

一年後輩にあたる澤田^{さわだ}美奈ちゃんは、私と同じくこの小さな会社で働く、数少ない正社員だ。ふたりとも、家事代行スタッフをメインとしつつも、訪問の仕事がないときは、状況に応じて事務の仕事を手伝ったりしている。

そのため、研修が終わればほとんど入社することのない登録制のスタッフに比べて、私たちは顔を合わせる機会が多い。それに歳が近いこともあって、大の仲良しだ。

美奈ちゃんは、少しチークを塗りすぎた頬を持ち上げて、にやにやと笑った。

「ね、ね、どうでした? 新しいクライアント」

……う。早速来たか。

「あー……ええと、若い方だったよ。お屋敷は北駅から歩いて五分くらいの高級住宅街にあつて、車五台分くらい横幅のある立派な門で――」

「ストローパーツ!!」

突然の美奈ちゃんの大声に、ビクツとした。アイコンで目力増し増しになった目で、美奈ちゃんが私をギラギラと睨^{にら}みつけてくる。

「そういうことじゃなくて。イケメンだったかどうか、ですよ!」

「あつ、そ、そういうこと? えーと、あの……イケメン、だと思っ」

そう言うと、美奈ちゃんはキヤーと叫んで私の肩をバンバン叩いた。

「やだあー、もう! 帰って来てからずうつとほけーつとしてるから、アヤシイと思ってたんです

よお。……あ。まさか、もう恋しちゃったとか？」

「ち、違っ……何言ってるの！」

「だって、社長でしょ？ 会社いくつも持ってるって、中惣さんに聞きましたよ。それでイケメンだなんて、もう狙うしかないじゃないですか、玉の輿たまこい！」

パチパチパチ、と拍手までして、自分のことでもないのに大はしゃぎする美奈ちゃん。

まったく、よくぞそこまで飛躍した考えができるものだど唾然あざんとする。それに、さつきから社長の中惣さんがそこにいるんだけど。

だけど、今の私にはそんな軽口に乗る心の余裕はなかった。

何しろ、今も銀行の口座に隠してある一〇〇万円の存在が、苦しくて、苦しくて。

胸にこびりついた黒いもやもやが晴れないのだ。

やっぱり、あのお金は明日の朝一番で返しに行こう。それで、お金の件はすっきりするはず。

問題は星見さん自身だ。あの強引な様子だと、簡単には引き下がってくれないだろうな……

と、そこへ、中惣さんからお呼びがかかった。まだ何か話したそうな美奈ちゃんを横目に、中惣さんのデスクへ向かう。

「はい、なんでしよう」

「今日行った星見さんのところ、どうだったかな、と思って。彼、イケメンだったろう？」

うっ。社長ともあろう人が、美奈ちゃんと同じこと聞きますか。

「ま、まあ、イケメンかどうかはさておき、優しそうな方でした。……あの、星見さんの顧客名簿

を更新したいので、詳細のデータをいただけますか？」

中惣さんは、あー、と言って白髪しろがまじりの後頭部で手を組み、「ない！」と言い切った。

……またこれだ。

本当に中惣さんのいい加減さには呆れる。

「あのですね。今日は本当は山中やまなかのおじいちゃんのところに行く予定だったんですよ。それなのに、今朝いきなり新規のお客様のところに行ってくれて電話で言われて、住所だけ知らされて。なんのデータもなく訪問させるって、酷ひどくないですか？」

「まあまあ、いいじゃないの。山中さんのところには別のスタッフ行かせたし。菜なちゃんだって枯れきったおじいちゃんより、若いイケメンの方がいいだろう？」

「ちよっ……！ なんてこと言うんですか」

「ま、山中さんを訪問予定ってことは、俺も知ってたんだけどね。でも、君に来てほしいって、星見さんたっての希望だったから」

「えっ」

そう言ったきり、言葉が続かなくなりました。

まさかのご指名……？

初対面だとばかり思っていたけれど。

「あの……どこかでお会いしましたっけ」

「先月、新和第一銀行しんわのパーティーに君を連れて行っただろう？ そのときに星見さんも来ていて

ね。少し話す機会があったんだけど、どうやら君に興味を持ったらしくて」

君に興味を持った、のくだりで、ドクンと心臓が跳ねた。頬がぐんぐん熱くなっていくのを止められない。

新和第一銀行のパーティーに同行した覚えは、確かにある。普段はその手の催し催しにひとりで行っている中惣さんが、その日はなんの気まぐれか『秘書』を連れていきたいと言いつ出した。

秘書なんてご大層なものは、この小さな会社には当然いない。それで、ちょうど事務所にいた私私に白羽しらはの矢が立ったのだ。

そのパーティーに同席していたと言われても、あんな立派な体格のイケメン、一度会ったらそうそう忘れるとは思えない。

とはいえ、紹介されたわけじゃないし、その日は確か目の調子が悪くてコンタクトができなかったのだ。たぶん、ちゃんと見えていなかったのだろう。

『君に興味を持った』という中惣さんの言葉が本当なら、初対面だとばかり思っていた彼が、強引に迫ってきたのもわからなくはない。けれど……

見初められたとは、とても思えなかった。

身も心も平凡を絵に描いたような私は、イケメンセレクトに受けるタイプではない。それに、あの妙に女慣れた雰囲気、私を不安にさせるのだ。

戸惑ったまま無言でいると、中惣さんがデスクの引き出しから名刺を一枚出してきてきた。それを受け取り、きれいに印刷された上質な紙に目をは合わせる。

「星見開発のメイン事業は不動産業らしいよ。だけど、俺にわかるのは名前と住所と、その名刺に書かれた情報、あとはインターネットで調べられるプロフィールくらいだなあ」

「えっ？ 知り合いじゃないんですか？」

「うーん、知り合いっていうか……新和第一銀行のパーティーで、少し話したって感じかな」

しれっとしたその言い方に、じわじわと怒りが込み上げてきた。中惣さんが懇意こんいにしている人だと思っただから、あんな強引な態度にも耐えたのに。

「パーティーで少し話を……。本当にそれだけですか？」

「ああ、それだけ。で、今朝いきなり電話で君を寄越してくれ、って言われてさあ」

中惣さんはへらへらと笑った。

「……いくらです？」

「は？」

「いくら借りたんです？ 星見さんに」

サンジエクスサンジエクスの経営が非常に苦しいことは、私もよく知っている。

この小さな会社で働く正社員は、営業兼社長である中惣さんの他に、私と美奈ちゃんのふたりだけだ。そんな私たちのお給料が遅れるのは、いつものこと。ついこのあいだも不渡りを出しそうになって、首の皮一枚で繋がったということも当然知っている。

個人宅へ訪問し、直接お客様とやりとりするこの業界は、トラブルも多い。それだけに、社長の中惣さんが大した打ち合わせもないままにスタッフを送り込むなんて、あり得ないと思っていた。

……絶対に何か裏があるはず。それが経営資金の援助であると、私はみた。にじり寄ると、彼は弱々しく肩を竦めた。

「ほんのちよつとだよ。銀行には融資断られちゃったし、破格の低金利で貸してくれるっていうからさあ。……つて。菜っちゃん、何か言いたそうだね」

……許さない。

要するに、私は借金のカタに身売りされたということか。そんな事情があったら、ますますこの話を断りづらくなってしまう。

無言でただ睨みつけられれば、中惣さんは落ち着きなくポケットから煙草を出して、口に啜える。だけど私は、火をつけようとする中惣さんの口から、容赦なく煙草を引っこ抜いた。

「社内は禁煙です」

「……す、すみません」

中惣さんは、煙草とライターを持ってすぐごとドアの外へと退散していく。その後ろ姿に向かって、ありとあらゆる罵詈雑言を吐き散らした。もちろん、心の中で。

*

「鷹山。さっきの子、どう思う？」

シャツのボタンを首元まで留め、ネクタイをきっちり締め直しながら星見は尋ねた。鏡に映る顔

はいたずらっぽい表情を浮かべていて、まるで子供のようだと思ながら思う。

振り向けば、自分より少し歳上の秘書、鷹山が眉間に皺を寄せていた。ただでさえ三白眼の強面の男だ。それが苦虫を噛み潰したような顔をしているのだから、恐ろしいにも程がある。

忠実な秘書は、「絶対に出てくるなよ」という主人の言いつけを、最後まで守って隠れていた。

星見が初対面の菜のかを書斎に連れ込もうが、彼女の帰り際、腰に手を触れようが。

「相変わらず悪い趣味ですね」

「……彼女が？　かわいいだろう？」

「違いますよ。あなたのやり口が下衆いと言っているんです」

秘書の忌憚ない口ぶりに、星見は含み笑いをした。

「お前こそ、相変わらず酷い言い方だ」

「今に地獄に落ちますよ。それか、刺されるか」

「おいおい、勘違いするなよ。俺が彼女に興味を持っているのは本当だ。その証拠に、胸の鼓動がまだこんなに速い」

星見は芝居がかった仕草で、自分の胸に手を押し当てた。しかし、鷹山の目つきは冷ややかだ。

「興味を持つ相手は、あなたの身分に見合った女性だけでいいでしょう。そろそろ遊びはやめて、身を固めたらどうですか？」

「三十二で？　まだ早いだろう」

「全然早くありません。いつまでも独身でいると取引相手にも舐められます」

ふ、と思わず星見は笑った。

「俺だっていい相手がいれば、いつでも思ってるよ。ただモテないだけで」

「冗談を。だからといって、あの世間知らずそうな家政婦に手を出すこともないでしょう」

「まだ何もしてないって。お前と話していると、自分が本当に酷い人間に思えてくる」

言い返して、星見は菜の姿を思い浮かべた。

ストレートの黒髪にナチュラルなメイク、ネイルもしていなかったし、服装も身につけるものもすべてが安物でパツとしない。

確かに世間知らずそのものといった感じだが、顔立ちは悪くなかった。

それに、白いシャツに盛り上がったふたつの膨らみ。メリハリのある腰つきと、やや短めのタイトスカートから伸びる脚が妙にそそる。

先月行った銀行のパーティーで見かけたときも、そこが気になったのだ。磨けば光りそう——そう思ったからこそ、工作上特に絡みのなさそうな家事代行業者の社長に声をかけた。

経営者である中惣社長の話によると、彼女は今二十六歳で、高校を卒業後に上京して以来ずっと彼の下で働いているのだとか。ひとり暮らしをしているというので、住み込みで働かせるには都合がいいと思ったのだ。

彼女の欲しがるものはすべて与えてみたい。普通の若い女性では、到底手が届かないような服を着せて、更に目が飛び出るような報酬も与えよう。これだけ待遇がよければ、住み込みで働くことを断る理由もないはず——

星見は腕時計をチラリと見て、玄関に向かって歩き出した。その後ろを、鷹山が一定の距離を空けてついでくる。

「で、頼んでいたものは今日届くのか？」

「いえ。業者の都合で明日になりました。ベッドが大きいので組み立てるのに時間がかかるようです」

「そうか。ご苦労。……そんな顔するなよ。お前も彼女と時折は顔を合わせるだろう。仲良くしてやってくれ」

「はい。かしこまりました」

と、真顔で睨みつける秘書に笑顔を返して、星見は大事な商談のときに用いる赤いチーフを胸に挿した。

今日、ここへ来るのが本当に憂鬱ゆううつだった。

靴の中で眠ったままの一〇〇万円と、それを返すときの星見さんへの謝罪。

ふたつのことが私を苛さいなんで、結局夜もほとんど眠れずじまいだった。

布団の中でじつくりと考えて、いくら中惣さんがお金を貸してもらったとはいえ、やっぱりこの仕事は引き受けるべきじゃないという結論に達した。会社を通さずに報酬をもらって、奥さんの役を演じるだなんて……

涼やかな秋風の吹く中、星見邸はひっそりと静まり返っていた。

こつちが表側でもいいんじゃないかと思うほど大きな裏口の門は、重厚なブロンズ製だ。言いつけ通り、インターホンは鳴らさずに、鍵のかかかっていない門扉もんびを開けて中に入る。

敷石は高級感漂たう天然石。無駄に長いアプローチが、緊張を煽あおる。暴れ回る左胸に、私は手を当てた。

——意志を強く持つていくのよ、菜のか。

言い聞かせながら、これまた裏口とは思えないほど立派な扉を開けた。

が、しかし。

「わふっ」

突然視界が遮さえぎられた。と同時に、嗅ぎ覚えのある匂いに包まれる。

「よかった。来てくれないんじゃないかと思った」

ほとんど塞ふさがれた耳にくぐもって聞こえるのは、星見さんの声だ。息が苦しい。そして、このあたたかな感触は——

「ひゃっ！ ほっ、星、ぐふっ……！」

一瞬でパニックに襲われた。頬に当たる体温。背中に回された力強い手。私は今、彼の熱い抱擁まよとを受けているらしい。

……この私が男の人の腕の中に？ あり得ない。この歳になるまで、男の人と手を繋つないだことすらないのに！

恥ずかしくて、全身が燃えるように熱くなる。

星見さんの大きな腕は、隙間を一ミリたりとも許さないとでもいうように、私の身体をすっぽりと包み込んでいます。逃れようともがくけれど、体格差がありすぎてまったく身動きが取れなかった。

そうこうするうちにお腹に当たる何かがだんだんと硬さを増していく。この歳まで男の人を知る機会のなかった私だけけれど、その辺の知識がないわけじゃない。も、もしかして、これは……

「ほっ、星見さん、痛いですっ」

「星見さん？ そんな呼び方やめてくれ。君は俺の妻なのに」

でた、妻とか……！

抱きしめたままそんなことを言うので、いたたまれなくなつた。そもそも私は夫婦ごっこなんて認めていない。このお金だつて返すつもりで来たんだから。

「あの、そのことでお話が」

「何？」

「そ、その、表向きは妻を演じるといふのは、一体どういうことでしょうか」

言いながら、顔が更に真っ赤になつていくのを感じる。妻なんて言葉、口にするのも恥ずかしくてどうにかなつちやいそう。

「ああ、そのことか。……実は、近所に世話好きの奥さんがいるんだけど、あまりしつこく見合い話を勧めてくるんで、ひと月前に結婚したということにしたんだよ」

「えっ」

「君はこれまで俺と一緒に仙台せんたいで暮らしていて、今日こつちに来たことになっている。不要品の処分やなんだかんだで来るのが遅くなつた、という設定で」

「設定、ですか？」

「そう、設定」

……呆れた。と同時に、ほんのりと怒りを覚える。

一〇〇万円という額は、普通のサラリーマンが何か月もかかつて稼ぐ大金だ。それをこんな理由でポン、と出してしまふなんて……

とはいえ、ゆとりがある人のお金の使い方としては、わからないでもない。

忙しい彼らは時間をお金で買うものだ。だから星見さんにとつても、この一〇〇万円はご近所づきあいのわずらわしさを避けるための、必要経費ということなのだろう。

『妻』を演じるのは、簡単なことじゃない。しかも庶民の、ではなく、セレブの奥様だ。要求が高

いなら、破格の賃金でも納得がいく。

「これから一緒に買い物に行こう。そのために今日は仕事を入れずに一日空けておいたんだ。午後

に新しいベッドが届くから、午前中に用事をすませてしまわないと」

「は〜!?」

ベッド!?

新しいベッドだなんて、嫌な予感しかしないんですけど……!

ぐいぐいと星見さんの胸を強く押すと、やっと少しだけ隙間ができた。それでもハグを解く気はないらしいので、目を合わせないようにして話す。

「あ、あの、私も一緒にお買い物に行くんですか？」

「そうだよ」

「かつ、家事は……お掃除とか、お洗濯とかはやらなくていいんでしょうか？」

「家事? それはいいだろう。掃除は毎日午後専門の人が入つてるし、洗濯は業者が取りに来る。庭は資格を持ったガーデナーが手入れしているし、それに食事はほぼ外食で——」

「あの」

「——ん?」

「——ん?」

堪えきれずに口を挟んだ。星見さんが眼鏡の向こうの目を丸くする。

「掃除と洗濯は既に外注に出している、食事はほぼ外食、ということですか？」

「そうだよ」

「そして、私が住み込みで働いても、そのスタイルを変えるつもりはないと」

うん、と星見氏。

——理解不能。

私の脳内がその言葉で埋め尽くされた。

……なんだろう、これ。もしかしてバカにされてる？

渾身の力でハグを振りほどいた。

「差し出がましいようですが、お話を伺っている限りとても家事代行が必要とは思えません。奥様を演じる人が必要なら、タレント事務所かどこかに依頼してください。あの、これお返しします」

鞆から一〇〇万円が入った封筒を取り出して、星見さんの胸元に突きつけた。

三〇〇万円の夢が儂く消えゆくのは、本当に、本当に、悲しい。だけど、なんの仕事もせずに賃金を受け取るなんて、私のモラルとプライドが許さない。

では、と踵を返して、玄関のドアノブに手をかけようとした。と、すかさず星見さんに反対の首を掴まれる。

「どこに行くつもりだ」

後ろで低い声が響く。

恐る恐る振り返ってみると、意外にも彼は悲しそうな顔をしていた。

「帰るんです。私の居場所にはないようですから」

「……楽をして金を稼ぐのは嫌、そういうこと？」

「もちろんです。それに私は、家事代行のスタッフですから。そういった仕事がないのであれば、ご縁がなかったというだけで。それでは」

再び扉の方に身体を向けると、ものすごい力で引つ張られた。

「ああ、頼むよ。行かないでくれ。君の言い分はわかったから」

「……と、おっしゃいますと？」

とりあえずドアノブに伸ばしていた手を引つ込めて、星見さんに向き直った。きちんと話し合う、そういうことならもう少しここにいてもいい。

彼は私の手を握ったまま、ちよつと呆れた顔をした。

「君が仕事を与えてほしいと言うなら、今使っている業者をすべて解約しよう。ただし、この家は広い。掃除も洗濯もだなんて、大変だよ？」

「料理もです」

きつぱり言ってやると、星見さんは天を仰いだ。

「強情だな。……よし、わかった。俺も外食には飽き飽きしていた。ちよつど普通の家庭料理を食べたいと思っていたところだ。……で、覚悟はあるの？」

「……はい！」

ニタア、と顔が崩れてしまうのを我慢することができなかった。これで仕事も、三〇〇万円をも
らう大義名分もできた。

「ジバ、お仕事！ ジバ、賃金!!」

私の顔を見て、星見さんもやれやれ、といった具合に相好を崩す。

「君は面白い子だな。それでこそ育て甲斐があるというものだが——」

「はい？」

「とりあえず、今日のところは買い物に付き合ってもらおうよ。この辺りは都内でも有数の高級住宅
街なんだ。表向き俺の妻である君に、そんな格好で外をうろつかれちゃ困る」

「……そんなに酷いですかね」

裏玄関には大きな姿見があったので、改めて自分の姿を確認してみる。……が、すぐに目を逸ら
したくなった。なんの変哲もない白のブラウスに黒のスーツを着た私は、まるで営業マン、もしく
はベテランの就活生みたいだ。

「少なくともこの地域に暮らす奥様ではないな。君は元の作りがいいから、少し手を加えるだけで
ぐっとよくなるはずだ。さあ、時間ももつたいないから行こう」

星見さんは玄関収納を開けて、奥のフックから車のキーを取った。そして、私に向かって手を差
し出してくる。

「ほら、菜のか」

「は、はい……」

目の前にある大きな手に自分の手を重ねながら、始まってしまった夫婦ごっこに動揺する私
だった。

*

「疲れた？」

「いいえ。全然」

ひと通りの用事をすませて帰ってきたのは、夜の七時過ぎだった。

あたりはすっかり暗くなっていて、昼間見た街の景色とはまるで雰囲気が違うことに驚く。星見
さんが運転する高級車は表通りから直接住宅街に入り、どこをどう走っているのかわからないよう
に屋敷までたどり着いた。

星見さんはガレージに入れた車から降りると、助手席側に回りドアを開けてくれる。

「はい、奥さん」

「あ、ありがとうございます」

と、差し伸べられた手に自分の手を重ね、車から降りた。彼自身も疲れているだろうに、にこつ
と微笑みかけてくるものだから、却って申し訳なくなる。

『女性は自分でドアを開けて車を降りてはいけない』と言うので、今日はずっとこんな具合に従っ
ていたけれど——

……はあ。

正直言って疲れる。

自分でできることは自分でやる、これ人間の基本。なんでもかんでもエスコートが必要だなんて、慣れない私にはむしろ負担でしかない。

だから、『疲れてない』と言ったのも本当は嘘。

よく知りもしない男性と一日一緒に過ごしたのだから、当然気疲れもする。

こんな調子でこの先三か月、星見さんとふたりきりでやっていかなくちやならないなんて……ちよつと不安だなあ。

十月に入って、だいぶ夜風が涼やかになっていった。肌を優しく撫でる夜気にぼうつとしていて、星見さんが後部座席をごそごとやり出した。

「ああつ、私を持ちます！」

山と積まれたショップの袋に慌てて手を伸ばす。けれど、星見さんの腕に止められた。

「こういうのは男の仕事。君は自分が転ばないことだけに気を使えばいい」

「う……確かに。わかりました」

実は私、今ものすごく足が痛いのだ。

今朝、星見さんの車に乗って最初に連れて行かれたのは、都心にある彼行きつけの美容室。

とてもラグジュアリーな空間でカットとパーマをしてもらい、昼食を挟んだあとは行く先々でのショッピング。その都度新しい服に着替えて、靴すらも新品に履き替えて。……で、案の定靴擦れ

だ。慣れないヒールの高さも相まって、つま先も踵も強烈な痛みを発している。

これはきつと、いつもと違うお高い靴だから、足が全力で拒否しているんだろう。

ガレージから玄関まで歩くあいだ、星見さんはチラチラと私の方を振り返っては立ち止まった。暗闇と足の痛みでもたついているせいだと思っていたけれど、どうやら違ったらしい。

アップローチを半分ほど進んだところで足を止め、彼は私の全身を頭のとっぺんからつま先までくまなく眺めた。とても眩しそうな眼差しで、私がどぎまぎしてしまいうくらいに。

「そのヘアスタイル、すごく似合ってるよ。それに、服も」

「そ、そうですか……?」

いやちよつと、照れちゃうんですけど……

今の私の格好は、朝この家を出発したときとすべてが違っている。

背中まであった髪は肩下の長さでカットし、ふんわりとゆるいデジタルパーマをかけた。

実用オンリーだったシャツとスカートは脱ぎ捨て、代わりに着ているのはとろみのある生地の人っぽいワンピース。たつぷりのドレープが風に揺れて、すこしこそばゆい感じの……

「あの……今日はありがとうございました。美容室に連れて行っていただいたり、服までたくさん買っていた——」

むにつ、と何かに突然唇を塞がれて、言葉は奪われた。……あたたかい。そして柔らかい。この感触は、一体。

目の前に星見さんの顔がある。

えっ。

「……ちよ、ちよと待って。ここでいきなりキスですか……!？」

それはほんの瞬間の出来事で、柔らかな唇は音もなくすぐに離れていった。けれど、一回は一回だ。その証拠に心臓がバカみたいに高鳴っている。

えーと、何か話さなきゃ、何か、何か――

声を出そうと試みるけれど、焦るばかりで何も言葉は出てこない。すると、目線よりだいぶ高い位置にある端整な顔が楽しそうに解けた。

「そういうのは玄関に入ってからでいい。夫に礼を言うのに畏まった態度の奥さんなんておかしいだろう?」

と、目をきらきらと瞬かせながら、クスツ、と笑ってみせる。

何この態度。この余裕。

星見さんは何事もなかったかのように、再び歩き出す。残された私はポカンと口を開けたまま、真つ赤になった頬を持って余すばかりで。

……一応断っておきますけど、これ、私にとってはファーストキスでした。そういうのって、もつと素敵なシチュエーションで、最適なタイミングで奪われるものだと思ってました。

なんか、なんか……納得できないっ!

星見邸には既に明かりがついていた。

最新式のセレブの家は時間が来ると自動点灯するのだな、と思っていたけれど、どうやらそれだけではなかったらしい。中に入ると、だだっ広い玄関ホールには見知らぬ男性がいた。

顔も身体もひよろりと細長い、三白眼の無愛想な男だ。オールバックに黒色のスーツ。ぱつと見、星見さんよりいくらか年上かと思う。

その男性が、星見さんを見るなり頭を下げた。

「社長、おかえりなさいませ」

「ただいま。鷹山、今日は悪かったな」

「何も問題はありません」

鷹山と呼ばれた男はそう言って、チラリと私を見た。目が合ったので、慌てて頭を下げる。

「こんばんは」

「初めまして。星見の秘書で鷹山と申します」

「サンジェクスの佐木菜のかです」

と、いつもの癖で言ってしまうから、はっ、と口を押さえる。表向き星見さんの妻だという演技を忘れていた。

「大丈夫だよ。さすがに秘書には言ってる」

すかさず星見さんに告げられ、ホツとして、よろしくお願ひします、とお互いに挨拶した。

「ベッドは無事搬入できた?」

リビングの床に荷物を下ろしながら、星見さんが鷹山さんに尋ねている。本当は午後には帰るつ

もりがすっかり遅くなってしまったので、彼はベッドのことを気にかけていたのだ。

こういうとき、家事代行スタッフとしては、会話はなるべく聞かないようにしなければいけない。それに、ふたりの話がすぐに終わるとも限らないので、私はリビングから続くキッチンに入ってお湯を沸かすことにした。

初めて見るキッチンで電気ケトルを見つけ出し、水を入れてセットする。続いてお茶かコーヒーがないかとあちこち探す。

「搬入業者は午後一時半に参りまして、組み立てを終えて四時に帰りました。ご指示通り、二十帖の方の寝室に設置してあります。それから、宅配業者が二件。荷物は納戸に入れました」

「うん、ご苦労」

……二十帖の寝室？ でかつ！

聞かないようにと思っただけでも、耳はしっかりリビングの会話を拾っている。とりわけ、新しいベッドの話題には敏感だ。

それはまさか、私のベッドだろうか？ それが二十帖の部屋に置かれるのだとしたら、使用人に使わせる部屋にしては贅沢すぎませんか？

「明日のスケジュールですが、朝九時に山路興産で商談がありますので、八時半にお迎えに上がります。その後の予定は、十二時にアリスト設計事務所の坂田社長と会食、午後一時半より仮称新宿星見ビルの外構工事視察、二時半より渋谷の第六星見ビルの境界確認と続いております。それから、午後のどこかで藤島エステートの桜田専務が面会をご希望でしたので、途中で連絡を入れたい

と思っております」

「わかった。その辺はお前に任せる」

「差し出がましいようですが……朝食の材料がないのではと思い、買い物をして参りました」

「さすがだな、やはりお前は気が利く」

「なんですと……？」

音を立てないよう、そーつと巨大な冷蔵庫を開けてみる。すると――

スカスカの庫内には、未開封の牛乳とベーコン、卵があった。更に、野菜室にはレタス、キャベツ、ピーマンが。冷蔵庫の脇の棚には食パンとクリームコーンの缶詰、玉ねぎとケチャップが置かれている。

念のためシンクの戸棚を開けてみると、鍋やフライパンといった調理器具と、基本的な調味料の類があった。

……なるほど。それを知ったうえでこの食材を買ってきたというわけか。確かにこれだけあれば、ベーコン&スクランブルエッグと、サラダにコンソープあたりが作れるだろう。

あらかじめメニューまで考えて買い物をしてきたに違いない。鷹山さんはなんて有能な人なんだ。私よりもはるかに手際よく家事もこなしそう。

お湯を沸かしているあいだに、ティーポットに茶葉を入れる。と、リビングから「それでは、失礼します」という声が聞こえてきた。慌ててキッチンから飛び出せば、鷹山さんはもう玄関まで行ってしまっている。

「本日はいろいろとありがとうございました」

追いついて声をかけると、彼は使っていた靴ペラを戻しながら私を一瞥した。そして、「いいえ」とだけ言って、スーツの乱れを整える。

……うーん。愛想がない。星見さんの秘書だというから少しでも仲良くなっておきたいけれど、正直、ちよつと苦手なタイプだ。

対応に困りそわそわしていると、向こうから話しかけてきた。

「佐木さん」

「は、はい。……なんでしょう」

「明日の朝八時半にお迎えに上がりますので、六時には社長を起こしにかかってください」

「え……随分早いですね」

「彼は非常に寝起きが悪いのです。大事な商談につき、遅刻はできませんので。では」

「わかりました。……お疲れ様です」

鷹山さんは軽く会釈して星見邸を出ていった。ギューン、と電子錠が締まる音がして、ほう、とため息を吐く。

鷹山さんは、結局一度も笑顔を見せなかった。まあ、秘書の仕事はスケジュール管理がメインであるからして、家政婦への愛想とか冗談とかは不要なのだろう。

それにしても……星見さん、寝起きが悪いのか。

なんでもきちつとこなして隙がなさそうに見える彼にも、意外な弱点があったらしい。

基本キリリとしているか、にこつとしているかなので、寝起きの重たい顔は想像できないけど——もしかして、朝はものすごく機嫌が悪いのだろうか。そうだったら困るなあ。

玄関で立ち尽くしていると、後ろでみしり、と床を踏む音が聞こえた。

「菜のか」

「ひゃっ——」

振り返ったところには星見さんが立っていた。どういうわけか上半身裸だ。スーツを着ても隠しきれていなかった胸板はこんもりと厚くて——

肉体系のお仕事……ではなかったですよね!?

逞しい身体から視線を逸らした私を、星見さんはいきなり抱きしめた。

「ああ、やつとふたりになれたな。まずは一緒にシャワーを浴びようか」

ちよつとちよつと、何言っちゃってんの、この人!

「だめです、ゼツタイだめ!」

「だめ? どうして?」

「あ、当たり前でしょう。本当の夫婦じゃないんですから……!」

頬に当たる肌の感触があたたくて、艶めかしくて。

恥ずかしさで気が変になりそう。

耳に直接飛び込んでくる星見さんの鼓動はとてもゆっくりで、私を抱きしめながらも平静を保っている。そのことに、ちよつと腹が立った。こっちは心臓がばつくんばつくんしすぎて、今にも死

んじやいそうだったというのに。

「あああの、ちょっと、放してください」

「放さない」

「なっ……！ どうしてこんなことするんですか!？」

もがけばもがくほど強く抱きしめてくる。全然逃げ出せなくて、まるで罠にかかった獲物みたいだ。

星見さんは私に覆い被さるようにして耳に唇を寄せた。

「ほら、いきなり『今日からあなたは王様ですよ』と言われても、急にそれらしくはならないだろう？ だけど、毎日王様として扱われていれば、自然と王様らしい振る舞いが身についてくるものだ」

「はい!？」

「だから外にしようが家にしようが、俺は君を妻として扱うことにした。身も心も星見了の妻になつてしまえば、嗜好きのご近所の奥様方を相手にしても、ボロの出ようがないだろう?」

「ええっ」

な、なんとという恐ろしいことを……! !

につこりと微笑む顔を、私はまじまじと見詰めた。こんなにイケメンなのに、どうしてこの人はこんなにも話が通じないんだろう。

しかし、イケメン効果なのか、それとも今日一日で星見了という人物に慣れてしまったのか。腹

が立つというよりも、強引もここまでくるとすごいな、と感服してしまうから不思議だ。

とはいえ、ここは受け入れるわけにはいかない。ずるずると浴室に向かって引きずられる脚を、なんとか踏ん張った。

「ひゃ、百歩譲って、ここはわかりましたと言っておきます。でも、だからといって一緒にシャワーとか、ホント無理ですので」

「本当に?」

「本当に、です」

こくこく、と頷く。

「残念だな。じゃ、先にシャワーを浴びてくるよ。菜のかは俺のあとに入れればいい。あ、納戸に置いてある宅配便の荷物は君のネグリジェと下着だから、好きなものを選ぶといい」

「……下着? 私のために用意してくださいませんか?」

「そうだよ。俺が自分で選んだ。気に入ってくれるといいんだけどな」

にこっ、と笑って、腕の中にいる私を見下ろしてくる。星見さんが自ら選んだなんて、またもや嫌な予感しかない!

ようやく私を解放した彼がバスルームに消えたあと、階段の向かいにある、納戸とは思えない広さの部屋を開けた。入ってすぐの場所に置いてあった「佐木菜のか様」宛の段ボール箱を開封してみれば――

とても高価そうな化粧箱から出てきたのは、予想通り超セクシーな下着の山。上下はもちろんお

揃いで、下はどれもショーツと呼ぶには最小限すぎる布しかないデザインだ。

いや、ちょっと待って。中には布じゃないものもある。

レース？ 紐？ ……それに、チェーン!?

こんなものを身につけさせて、一体私に何をしようというのか。
まさかまさか。

『妻』ってやっぱり、そういうことなの!?

*

とてつもなく豪華で真新しいベッドの上に、私は気をつけの体勢で横たわっていた。
だって、天蓋つきなんです。

高級レースのついたオーガンジーなんです。

それが天井からふあさり、と垂れ下がり、えも言われぬラグジュアリーな雰囲気醸し出しているのです。

キングサイズのこの真っ白なベッドには、ヘッドボードにもフレームにも、美しいロココ調のレリーフが彫られている。おそらく手彫り。以前にこういうベッドをお客様のお宅で見たときには、
〈MADE IN ITALY〉と書いてあった。

こんなお姫様みたいなベッドを用人のために用意しちゃう星見さんは、ちょっとどころかだい

ぶイカれてると思う。

で。

「あの……いつまでそこに?」

ベッドの脇に椅子を置いて座っている星見さんに尋ねた。

彼はドラマや映画に出てくる気障な男よろしく、白いホテル仕様のバスローブを羽織っている。

これでブランドグラスでも持っていれば完璧だ。……本当にあるんだな、こういう世界が。

彼は小首を傾げて、蠱惑的な目を私に向けた。

「いつまで、つて。ここにいちや、だめ?」

「だめっていうか……。見られてると落ち着かなくて眠れないです」

「電気を消さないからじゃないの?」

と、ベッドに置かれた照明のリモコンに手を伸ばす。

「だめえっ!」

焦って阻止すると、「じゃ、隣に寝てあげようか」と、今度はいそいそとベッドに上がろうとする。慌ててふかふかの羽まくらを振りかざして威嚇した。

「もう、だめに決まってるでしょう!」

「じゃ、どうしてそんな端っこにいるの? てっきり、俺のためにスペースを空けてくれてるのかと」

「違います。危ないから星見さんから離れてるだけです」

キツと睨みつけながら言うと、彼は再び椅子に腰を下ろした。
うん、そうしてくれれば少し安心だ。いい加減眠らなくちゃ。明日は六時に星見さんを起こすと
いう初仕事があるわけだし、と肌掛けを顔まで被って目を閉じる。

……

……

表面上は静かなときが流れているかのように感じる。ところが、肌掛け布団の上から目を出して、
チラ、と窺えば、星見さんは私のことを熱い眼差しでじーっと見ている。

もう一度布団を被る。

チラ。

……まだ見てる。

それを何度か繰り返すうち、ついには私の方が折れた。

「あの」

「ん？」

「……どうしてそこにいるんですか？」

尋ねると、彼は肉感的な唇をちよつとだけ曲げてみせた。

「君が気になってここを離れられないだけだ。気にしないで」

と、思いのほか優しく微笑むので困ってしまった。

罪悪感がないわけじゃない。私は居候の身でありながら、お姫様みたいなベッドを独り占めして
いるのだから。でも、その件と彼をベッドに招き入れることは別問題だ。寝室は他にもあるはず。
私たちは一緒に寝るべきじゃない。

彼の態度には、今日の私は本当に戸惑いつばなした。

慣れないエスコートに、何度もやられたレディファースト。昼食に入った高級料理店でも、食べ
きれないほどの量を注文したり、料理を取りわけてくれたり。高級ブティックでは、桁を間違えて
るんじゃないかと思うような服やバッグを次々に買ってくれて。

私がちよつとでも関心を持ったものはすぐにお買い上げしてしまうので、途中からは商品にうか
つに手を伸ばせなくなつたくらいだ。

彼は私をお姫様のように扱い、そして、とにかく甘やかした。だけど、どれだけ頭を捻って考え
ても、私には星見さんにこんなにしてもらう理由がない。

となれば、どう考えても彼の目的は――

「あの一……。やっぱりこれですか？ 破格の賃金の理由は」

「これって？」

「だって、いくら住み込みで働くと言っても、ひと月で一〇〇万円もいただけるなんておかしいで
すよね。しかも、高価な服やバッグもたくさん買ってもらって、こんなベッドまで用意してもら
えるなんて。だから、やっぱり……。何かそういう……。サービスも含まれての一〇〇万円なのかな
あ、って」

星見さんにはっこり笑って、「ベッドに座っても？」と聞いてきた。警戒しながらも、こくりと頷くと、彼は落ち着いた動作でそこに腰かける。

「この仕事をしている者にとっては、一〇〇万円って便利な金額なんだよ。土地建物売買の手付金に一〇〇万。住宅建設の契約金に一〇〇万。この客とはきちんと最後まで取引ができそうだな、と信用させられる額だ。帯封がついているから、ぱっと見て一〇〇万という金額がわかるのもいい。君にその額を提示したのは、きつと職業病だな」

「なるほど。……本当にそれだけですか？」

返事の代わりに、星見さんは爽やかに微笑んだ。それには私もついつられて、ちよつとだけ頬が持ち上がる。ラグジュアリーな男の自然な笑顔には、そういう魔力があるのだ。

「でも、なぜ君なのか、という疑問は晴れないよね。君はきつとこう思ってる。『妻を演じるだけの女性なら、女優の卵を雇えばいい。住み込みの家事代行なら、もつとベテランで有能な人がいるはずなのに』とね」

その通り！と、こくこく頷くと、星見さんは「失礼するよ」と言いながらベッドに乗った。そして横たわると、子供にお休み前のおとき話を聞かせる父親のように、肘枕をして私の方を向く。

「君を最初に見たのは、先月あった新和第一銀行のパーティーでのことだ。中惣さんに聞いてる？」

「はい、一応。そのときに星見さんから私のことを尋ねられたと伺いました。でも——」

だからと言って、高額な報酬を支払ってまで秘密裏に私を雇う理由にはならない。

中惣さんは「君に興味を持ったらしい」というようなことを言っていた。けれど、それが本当

だったとしても、きつと人間的な興味だろう。会話もしていない相手に恋愛感情なんて生まれなはずだ。たぶん。

「もつたくない、と思ったからだよ」

「……え？」

「女性って、誰かが自分のことを見ていないかと常に気にしているものだと、俺は思うんだ。自身にそれが気づいていなくてもね。そうは思わない？」

「はあ。……そういうものですかね」

「でも、あの日の君はそうじゃなかった。周りにいる人は皆石ころか何かで、自分の姿をその目が捉えるなんて思ってもいない。わからなくもないよ。銀行のパーティーだから、お客はほとんどが会社経営者や地主や大口顧客。つまり若い男じゃない」

でもね、と言って、星見さんは少し寂しそうな目で私を見詰める。

「その中で、唯一と言っていい若い男だった俺のことさえ、君はまったく眼中にないようだった。その証拠に、昨日会ったとき『初めまして』と言われた」

あ。

言われてみれば、昨日の朝、星見邸を初めて訪問した際、そんな風に挨拶した覚えがある。だって、てつきり初対面だとばかり思っていたから……

「す、すみません」

肌掛けを握り締めて縮こまると、「ちよつと寂しかったなあ」と星見さんは残念そうに笑った。

別に怒っているわけではなさそうだ。……よかった。

「若い女の子が、それじゃあもつたないと思わない？ チャンスが転がっているのに、そのことに気づこうともしないなんて」

「チャンスだなんて……。私にはそういうの無縁ですから」

その言葉に、星見さんはちょっと眉を顰めた。黒ぶちの眼鏡を外して、妖しい光を宿した目でじつと見詰めてくる。

「そういう考えは終わりにした方がいい。現に俺はこうして——」

「あっ」

「君に……興味津々なんだから」

いつしか部屋の調光は落とされていて、ほんのりと闇を照らす間接照明だけになっていた。

逃げ場を失った私に彼が覆い被さる。無防備なネグリジェの喉元に、あたたかな息がかかる。

「ほ、星見さん——」

全身が燃えるように熱い。心臓は早鐘を打ち、今にも壊れてしまいそう。

「了と呼んで」

「了、さん……」

ふわふわと鎖骨をくすぐる彼の髪からは、私と同じシャンプーの匂いがした。

重なる体温。

引き締まった大きな身体がやけに熱い。

まさか、この展開は——。男性経験なんてこれっぽっちもない私が、恋人でもない相手と本当にそういうことに？

「震えてるの？」

「だって、だって、こんなこと」

「怖がらなくていい。優しくすると約束するから」

私の頬に手を当てて、菜のか、と諭すように彼は言う。琥珀色の目が揺らめいて、私をくぎづけにする。

「女性は、自分には価値があると信じることで美しくなっていくものだよ。俺の腕の中で、君もどんどん美しくなる。仕草や表情だけじゃない。髪も、肌も、指も。唇もね」

端正な顔がぐつと迫ってきて、あつという間に私の唇に彼のそれが押しつけられた。

柔らかな湿った感触。

ちゅ、と優しく啄んでは離れていき、何度も何度も、繰り返し私の唇を奪う。

さつき玄関前でされた軽いキスとは全然違った。海外の映画でときどき見る、ベッドの中で恋人同士が交わすような、とてもセクシーで欲望に溢れたキス。

そのとき、頭の中にあつたパズルが、カチリと音を立ててはまった。

——そうか、私はおもちゃなんだ。

彼は、富と美貌と名誉、そのすべてを手に入れた男に見える。女性にモテないはずがないその彼が、どうして私なんかを、とずっと考えていた。

もしかして彼は、自分に見合った高級な女には、もう飽きてしまったんじゃないだろうか。平凡が服を着て歩いているような私に、月額一〇〇万円の価値なんてあるはずがない。でも、彼が手塩にかけることよって、その価値が生まれるとしたら？

彼にとつて、この夫婦ごっこはゲームみたいなものなのかもしれない。それならば、よりにもよって私みたいな冴えない初心な女を選んだ理由もわかる。

「う、……んむっ！」

「大丈夫？」

塞がれていた唇が解放され、新鮮な空気が胸いっぱい流れ込んできた。咳き込みながら激しく呼吸を繰り返せば、困惑した表情の了さんがじつと見ている。

「……もしかして、キスは初めて？」

涙目になりながら黙って頷いた。この歳にもなってキスのひとつもしたことがないなんて、おかしな女だと思われるだろうか。

了さんは申し訳なさそうに自分の顔をこすった。

「それじゃあ、さっき玄関前であんな風にキスして悪かったね。びつくりしたろう？」

「はい」

「ということは当然……菜のかは処女、だよな？」

「……はい」

消え入りそうな声で答える。すると、了さんの顔が突然パアアと輝いた。くつきりした二重瞼を

大きく見開き、瞳を子供みたいにきらめかせる。

彼は私の頭を厚い胸に抱え込み、今日パーマをかけたばかりの髪をくしゃくしゃに撫で回した。

「そうか。それじゃあ、大事にしなくちゃいけないな。優しくするよ」

「本当に……？ 本当に優しくしてくれますか？」

「うん……約束する」

こつん、と私の額に自分の額をくつつけて、彼は至近距離で囁いた。その顔がとても嬉しそうだったから、こんな状況だというのに、私までほんのりと心があたたかくなる。

優しくする、という言葉に嘘偽りはないと感じた。

多少強引なところはあっても、彼はとても穏やかで思いやりに溢れた人だと思う。

今日一日一緒にいても、彼は常に紳士的な態度を崩さなかった。渋滞に巻き込まれてもイライラした様子を微塵も見せなかったし、お店の人にも決して横柄な態度を取らなかった。

もしも普通に出会っていたら、普通に恋に落ちていたかもしれない。うっかり気を許したら、これからだって彼を好きになってしまう可能性はある。

だから、考えようよっては、これは悪い話じゃないと思った。お金をもらって、贅沢をさせてもらって、女も磨けるのだから。

処女だって、なにも大事に取っておいたわけじゃない。ただ、今まで経験する機会がなかっただけだ。そのお相手が優しく素敵なイケメンときたら、これ以上幸せなことはないんじゃないだろうか。